

## 第五期（昭和30年～48年）

第一次高度成長時代。昭和30年ごろから高度成長が始まり、主要エネルギーは石炭から石油に変わった。輸出に有利な円安相場（固定制）、消費意欲の拡大、安価な石油、安定した投資資金を融通する間接金融、所得倍増計画などにより経済成長がもたらされた。昭和43年には国内総生産が資本主義国家の中で第2位に達した。缶詰の生産も右肩上が

りで推移した。

即席ラーメンやレトルト食品の登場、家庭への冷凍食品普及などで加工食品市場が多彩になった。昭和40年代後半にはファストフード店も開店し、食生活が多様になった。「大量生産・大量消費」の時代で、モノを作れば、ある程度は売りさばける供給主導型の時代でもあった。

### 缶詰産業の成長は輸出がけん引

生産に占める輸出比率は、

昭和35年で35.8%、水産缶詰では同年47.8%。生産量が戦後最高を記録した昭和55年で36.6%。水産缶詰で

は同年68.7%。

各種魚類缶詰輸出水産業組合が創立され（昭和30年ごろ）、輸出調整規定を運用。

### 缶詰が国内加工食品市場の主役

昭和30年代は家庭への冷蔵庫普及率が未だ低く、加工食品には「常温で流通・保管できる」ことが求められた。この

機能を備えた量販型の加工食品は缶詰以外には少なかった。

・缶ジュースが脚光を浴びる（昭和32年ごろから）

### 即席ラーメン登場（昭和33年）

後のインスタント食品ブームのさきがけとなる。同年に缶ビールも登場。都内百貨店のほとんどが冷凍食品売場を設置。（昭和30年代前半）

和30年代前半）

### レトルト食品登場

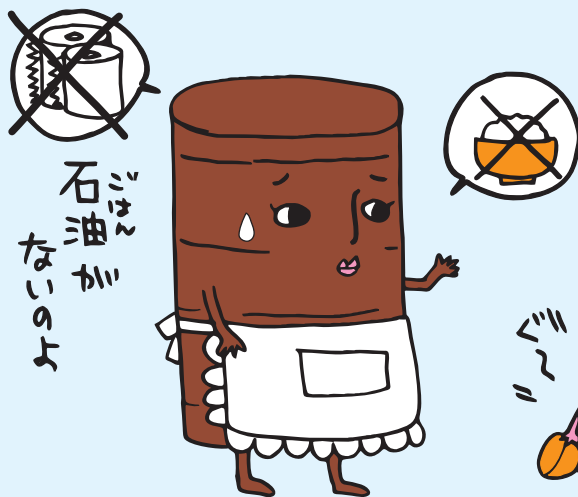
昭和43年に透明パウチ詰のレトルト食品発売。（翌年にアルミ箔ネットパウチ詰）

### コーヒー飲料缶詰登場（昭和44年）

### ファストフード店登場

昭和46年にマクドナルド・ハンバーガーが日本に第1号店を開店。

### 第一次石油ショック（昭和48年）



第4次中東戦争をきっかけに、原油価格が急騰。

わが国経済が戦後初めて実質マイナス成長に。

この頃から海外市場での日本産缶詰の価格競争力が低下、水産缶詰の一部（サバ、イワシ、マグロなど）を除き輸出が困難になった。内需転換。

団体の活動も製造に直接関連する「主原料取引」「IQ品目・輸入牛肉の割当斡旋など」「容器等資材」などに関する業界での情報交換や要望、「規制問題」等についての役所への要望、連絡調整業務が中心になった。